

# 政務活動費 活動実績報告書

令和8年3月17日


花下 主茂

件名	会派「市民クラブ」視察研修
使途	1 調査研究費 2 研修費 5 要請・陳情活動費
金額	44,592円
期日	令和 8年 2月 4日(水)~2月 5日(木)
場所	宮崎県宮崎市
目的	<p>地方議会では、議会活動が市民から見えにくい、分かりにくいという指摘が少なくない。投票率の低下や若年層の政治参加の減少も含め、議会として向き合うべき課題が積み重なっている。</p> <p>議会だよりや議会中継といった従来の広報手段は一定の役割を果たしてきた一方で、市民が議会に関わる入口が十分に用意されているかという点では、まだ工夫の余地があると感じる。そこで本視察では、宮崎市議会が、議員有志の政務活動から実証実験を経て、公式事業として予算化するまでの経緯を確認するとともに、実際の運用体制、合意形成の進め方、職員負担への考え方など、現場の感覚を含めて把握することを目的とした。</p>
参加者	花下主茂、川口誠二、田中栄一



宮崎市議会DXみやだん

宮崎市議会事務局 議事調査課



みやだん

## 【宮崎県宮崎市・議会DX「みやだん」について】

説明:宮崎市議会事務局 議事調査課 太田俊一郎 課長補佐兼政策調査室長

### 1. みやだん(まちだん)の位置づけと、公式発信としての扱い

みやだん(まちだん)は、「まちの談話室」を意味する名前のとおり、市民と議会が日常につながること意識して設計されたプラットフォームである。従来の議会広報が、議会から市民へ情報を届ける形に寄りがちだったのに対し、市民側からの参加や反応が入ってくる余地をつくらうとしている点に特徴がある。

今回、特に質問する中で確認できたのは、みやだん内で発信しているものは、議会として「公式の発信」として扱っているという点である。他自治体ではYouTube配信などを“補助的なサービス”と整理しているところも多いが、みやだんはその位置づけが違う。ここは、議会として一定の責任を背負う判断であり、発信の質や運用ルールも含めて、土台の作り方が重要になると感じた。



## 概要

### 2. 導入の経緯

この事業は令和3年に、議員有志による政務活動からスタートしている。その後、事業者との共同による実証実験を経て、公式に予算化された。最初から制度として固めるのではなく、試しながら形を整えていった経緯は、導入時の現実的な進め方として参考になった。

### 3. 推進体制

議員の関与は、全議員で一斉に進める形ではなく、広報公聴委員会の委員5名が中心となり、コンテンツのアイデア出しや方向性の検討を行っている。この体制だと、企画のスピード感は出やすいが、一方で議会事務局の関与が多くなるため、体感としては職員負担が大きくなりやすいとも感じた。

また、議会内には導入に慎重な意見もあったが、プロジェクトリーダーである議長が中心となって全会派に説明を重ねていったとのことで、日頃から議員一人一人とコミュニケーションを取り、土台を作っていた議長であったことが、事業化を進めるうえで効いている印象を受けた。

#### 4. 費用と運用体制について

初期費用については、実証実験の枠組みで進めたことにより、議会側の予算負担は発生していない。ランニングコストは月額22万円。これをもとに委託先が編集等を担い、議会事務局には「みやだん担当」を1名配置している。それとは別に、議会ホームページ担当も1名配置。

八女市で同様の運用を目指す場合、人員配置の前提がそのまま当てはまるとは限らないため、どこまでを外部委託し、どこを内製にするかは最初に整理が必要だと感じた。

#### 5. コンテンツの工夫

市長の記者会見(1時間程度)について、市民が全部視聴するには長いという前提に立ち、AIを活用して約5分程度の要約動画として発信している。形式としては、スライドに音声をつけた“ラジオのような”作り方で、視聴のハードルを下げている。情報を届ける側の都合ではなく、受け取る側の体感に合わせている点は、運用としての的を得たやり方だと感じた。

また、一般質問後の30秒間の感想動画は、各議員が一発撮りで収録し、そのまま配信している。うまく話せなくても編集で整えないことで、議員の人柄が伝わる面がある。議会を「遠いもの」にしない、という狙いが見えた。

**一般質問後の30秒感想**



令和4年9月  
感想動画の撮影・公開

**身近に感じてもらう為、プロフィールのイラスト化(R4.10)**



- 従来の議員名簿
- 必要最小限の情報のみ記載
- スマホでも見やすい縦スクロールに対応
- より身近に感じてもらうためイラストカードを作成

#### 6. 一般質問の見える化

一般質問の見える化(イラスト化)は、各議員が自分で文章構成を行う。議会だよりに載せた内容をそのまま載せる議員もいれば、アプリ上は文字数制限がないため、議会だよりに載せきれなかった内容を追加して掲載する議員もいる。紙媒体とデジタルが競合するのではなく、補完関係として運用できている点は参考になった。

さらに、定例会や議員ごとの発言傾向をヒートマップで示すことで、いま議会で何が注目されているのかが視覚的に分かる仕組みを作っている。市民向けだけでなく、議会内での振り返りにも使える可能性があると感じた。

**取組⑧ 一般質問の見える化**

- 定例会や議員毎にトレンドが分かるヒートマップを作成



4件の一般質問

**取組⑨ 一般質問の見える化**



未来新議会  
持原 知之  
Michikazu Mochizuki

## 7. アンバサダーと議場内撮影の扱い

若年層を中心としたアンバサダーが SNS 等で議会のことを発信したい意欲を持っている一方で、現状は議場内での撮影が禁止されている。この点について、次の3月議会から、アンバサダーによる議場内撮影をマスコミと同様に可能にしていく方向で話が進んでいるとの説明があり、議会の透明性を高めながら、市民発信にもつなげていこうとする動きとして引き続き注目したい。



令和4年8月  
8月5日より市民との実証実験スタート



## 所感

本視察を通じ、宮崎市議会における議会 DX は、市民参加の促進と議会活動の可視化を同時に進める取り組みであり、政務活動から実証実験を経て事業化まで持っていった点に特徴があることを確認できた。

一方で、八女市議会で導入を検討する場合、宮崎市議会と同規模の体制を前提にすることは難しいと感じた。したがって、目的を限定した小さなところから始め、成果と課題を共有しながら段階的に広げていく進め方が現実的だと考える。

合意形成についても、最初から全員の賛同を一度に取りにいくのではなく、試行の結果や実績を積み上げていく中で納得感を作っていくほうが、議会としても進めやすいという事例でもあり、様々な面で参考にしたいと感じた。

また、運用が始まると職員負担は確実に増える。八女市で実装するならば、更新頻度やコンテンツ種別、外部委託の範囲、議会内での分担(どの委員会がどこまで担うか)を、最初に現実的な線で整理しておく必要があるものと理解した。体制面・職員負担を踏まえながら、できる範囲の小さな実装から始め、議会内の合意形成を重ねていくことが重要であり、どうすれば実現できるか引き続き研究していきたい。